死の恐怖を先制する
―死生学と臨死体験からの統合的アプローチ―

愛知医科大学痛み医療開発寄附講座
教授
福井 聖
Sei Fukui

正看護師
看護教員養成課程修了
天音 恵奈
Ena Amane

座長　小林 正学

日本社会では、死について語る機会が乏しく、多くの人が「霊的苦痛」―自己の存在意義や死後の不安―を抱えたまま最期を迎える。だが、釈迦が「無常を観ずるは菩薩心のはじめなり」と語ったように、死を意識することでこそ、人生は光を帯び、他者への思いや感謝が深まる。こうした転換を支える学問領域が、死後世界を含む死の本質を科学的に探求する「死生学」である。

本発表ではまず、福井が近年の死生学研究を紹介する。海外では、死後の体験に関する報告が科学的に整理されつつあり、そこには「苦痛からの解放」「先立った者やガイドとの再会」「愛に満ちた世界への移行」といった共通点が見られる。魂は死によって消滅せず、過去・現在・未来を貫いて生き続けるという知見は、死への恐怖を和らげ、キューブラー・ロスの「死の受容プロセス」における最終段階「受容」へ導くと考えられる。

続いて天音が、ナースおよびセラピストとしての経験、さらに自身が余命宣告を受けた体験を通して得た死生観を語る。現代の日本では、健康である限り死を実感することは難しく、死を直視する機会は少ない。しかし「自分には余命がない」と実感した瞬間から、生命と真剣に向き合う精神的・知的な挑戦が始まる。その極限状態において、人は人生の本質や魂の目的と直面せざるを得ない。

この過程を乗り越える鍵は、①死に対する哲学を持つこと、②その苦悩こそが魂の輝きであると理解すること、③死は宇宙的な愛に基づいた“生きたカリキュラム”であるという認識を持つことにある。死を通してこそ、人は深く生き、魂の成長に至ることができる。

本発表では、科学と体験の両面から「死の恐怖を先制する」ための具体的視座を示し、人生における死の意味を問い直す場としたい。

略歴（福井 聖）

１９８２年 ３月　山口大学医学部卒業
１９８２年 ６月　大阪大学医学部麻酔科入局
１９８６年 ７月　西宮市立中央病院麻酔科勤務
１９９２年 ７月　関東逓信病院ペインクリニック科
（現NTT東日本関東病院ペインクリニック科）
１９９８年 ７月　滋賀医科大学麻酔科講師
２００８年 ４月　滋賀医科大学付属病院ペインクリニック科　病院教授
２０２３年 ６月　愛知医科大学痛み医療開発寄附講座教授

所属団体等

日本運動器疼痛学会理事、日本先制臨床医学会理事、日本疼痛学会名誉会員、日本慢性疼痛学会名誉会員、日本ペインクリニック学会名誉会員

資格

日本ペインクリニック学会専門医
日本麻酔科学会専門医

略歴（天音 恵奈）

平成８年　４月　名古屋第一赤十字病院に看護師として就職
集中治療室（ICU）および心臓血管外科・循環器内科・胸部外科の混合病棟にて勤務
平成１３年４月　蒲郡市立ソフィア看護専門学校にて看護教員として勤務（平成16年退職）
平成１７年10月　中国伝統楽器「二胡」と出会い、演奏活動を開始
平成２０年４月　中国文部科学省主催「日中平和友好条約締結30周年記念演奏会」
（於：中国西安）にて海外代表としてデュオ演奏を務める
平成２３年７月　上海音楽学院 研究科修了
平成２４年以降　橿原神宮をはじめ、春日大社・熊野速玉大社・熱田神宮・清水寺・延暦寺など、全国の名だたる寺社仏閣にて奉納演奏を重ねる
（熱田神宮では、コロナ前まで7年間、「秋の集い」での演奏を担当）

【プロフィール】
教員として在職中、関節リウマチと子宮肉腫を発症。子宮肉腫は発見時、18cmまで巨大化し、腹膜播種、　腸膜転移などを起こし、ステージⅣb診断。家族に余命3ヶ月が宣告されるが、その後ホルモン治療と、体外離脱体験や悟りと呼ばれる体験などを通し、精神的に苦難を乗り越え、肉腫発見時より現在まで20年命が続いている。
現在は、闘病中に出会った中国の楽器「二胡」の演奏家として、命や魂の輝きを音で表現している。

【メモ欄】